

# 評 価 委 員 講 師

三 宅 廉

皆さんの発表を伺ったあとの感想は、テーマが非常にVarietyに富んで居り、そのGedanken-gang が夫々の教育観に基づいて居るために、他の医学会に見られない、次元の高い味ひを感じさせた集会であったと思う。とくに私の頭に残ったのは、東京学芸大の井上教授の親準備性の発表で、育児教育に於ては、こどもが母親の教養、残業の相違による影響を、もろに受けること、更に自我が目醒め第二の誕生を踏み出した頃の幼児が母親の性格、教養、人生観などによって、ふり廻されていることを知り、更に久留米大山下教授の母子間の心理的距離に関する報告から見ても、家庭を構成する両親のこどもに対する態度いかえればそのMentality 又家庭内の精神的なBalanceの有無が、こどもに与える影響の深刻さを痛切に感じ、この領域は文化を導く倫理に対する統一的理解の必要性を痛感するのである。なお私の卑見を追加すれば、常に私の主張しているように今回報告されたさまざまな異常児の症例もその原因の追究には必ずその原点を衝き、その後長日月に亘って追求することの必要なことを力説したい。

私の最近に得た知見でも、私の病院で生れたこども達の乳児早期(1~6カ月迄)母と子のきづなが母乳そのもので行われた場合、15歳時になって知り得た母親の感想が、全人工栄養の場合に比し約3倍の頻度で、喜びと感謝で言い現されていたことは、あながち偶然とはいえない感じがしたのである。